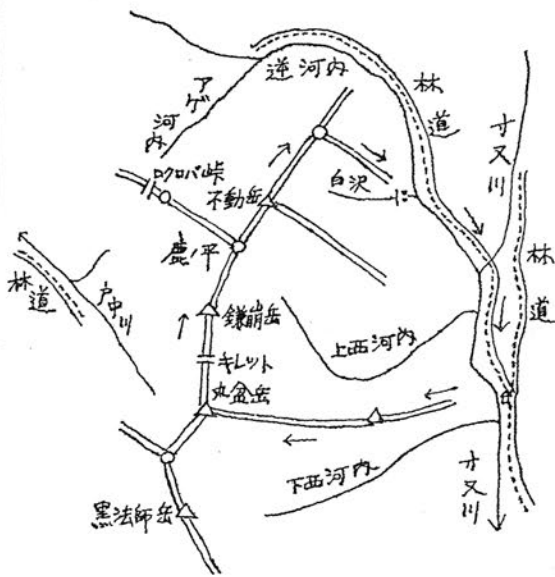




概念図 (1)

南アルプス・
鎌崩キレット
石間信夫



1983年 (昭和58年)
4月号 (No. 454)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目次

- 南アルプス・鎌崩キレット 石間信夫……(1)
- 一海外の山から一 Mountaineer と Climber ……(2)
- ナンガ・バルバート柱状東岩稜 登頂 (3)
- ヘルリッヒコッファー隊 ……(2)
- 覚雲寺と播隆 石坂久忠……(3)
- 図書紹介 ……(4)
- 「二高山岳会会報」「シルクロード 詳図」「登山入門」「カラコルム登山報告書」「せふり」
- 東西南北 ……(6)
- 「ネパール政府大臣一行歓迎会」
- 「ブータン ドルジェ氏歓迎会」
- 「三水会の恒例行事二つ」 「会員通信」
- 自然保護 自然保護委員会……(7)
- 報告 福島支部 ……(8)
- お知らせ ……(8)
- 会務報告・ルーム日誌・会員移動 (8)～
- 図書受入報告 図書委員会 (10), (11)

▶日本山岳会事務取扱時間
月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

丸盆岳と鎌崩岳の鞍部を削る壮絶な崩れは、深い原生林につつまれた南アルプス南部としては特異な地形なので、昭和五十四年秋の記録に従って簡単に書いて見ることにする。(同行) 地元山岳会 男子四名 女子一名

十一月二日(晴)、午後七時、二台の車に分乗して静岡を出発、寸又川林道と逆河内林道を分ける営林署の作業小屋へ泊る。縦の梢に十三夜の月を眺めながら前夜祭の酒に陶然となる。

十一月三日(高曇)、今日は水の無い丸盆岳の頂上へテントを張る予定なので、寸又川で各自二リの水を補給し、ずっしり重くなったザックを肩に一しきり登ると、大きな杉が二、三本立った天地の小祠へ出る。

右に上西河内、左に下西河内の径を見送って丸盆岳の東山稜へとりつき、キスリングにつかえるボサを分けてしばらく登ると、割合

はつきりした径が現われてくる。ここから二時間ばかりは、かなな径型や獣みちの断続したゆるやかな登りであるが、一五〇〇から一九〇〇の辺りまでは、ギツシリと笹の茂った胸つくような急坂である。

背丈を没する笹を押し分け、隠れた倒木をくぐったり乗り越えたり悪戦苦闘、二度とこんな所へ来るものかとボヤいていると、大きなカモシカが一頭、私達のアガキを眺めていた。

笹のうすれた一九〇〇のテラスで一いき入れ、すっかり傾斜の落ちた気持よい樹林の中を登って行くと、笹はまた少し深くなって丸盆岳の頂上へ飛び出す。時刻は午後三時少し過ぎ、小屋から丁度九時間のアルパイトであった。

山をきれいに「三」は持ち帰ろう

これが鎌崩のキレットである。浅いW字状に折れた岩稜は長さ五〇m、幅三〇m、両側は二、三〇mも切れ落ち、まるで煉瓦堀の上に岩屑のつたような感じである。

ヒマラヤやアルプスで悪場をこなしたHとSがザイル工作を始め四〇mばかり延びた屈曲点を、確保して一人ずつ渡る。

ここには枯れかかった小さな桐が一本生えているが、根はぐずぐ

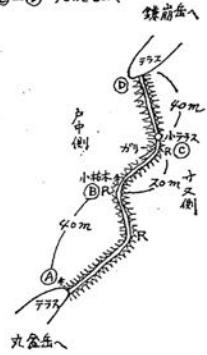
西側に大きなガレをかけた丸盆岳は、黒木の多い寸又連山の中では珍しく明るい頂上で、黒法師、戸中黒法師、鎌崩、不動、中ノ尾根、池口などがよく見えている。ガレ上縁の気持よいテラスにテントを張り、赤々と燃える焚火を囲んで十四夜の月を眺めながらたっぷり飲む。夜半から朝にかけて鹿の声を聞く。

十一月四日(高曇・夕雨)、昨夜雨がいったのか草や木は濡れ、淡い雲霧が盛んに流れている。午前六時半出発、ガレの上縁に沿って北山稜へ入り、小さな岩峰を二つ三つ降ると、両側は目もくらむばかり切れて狭いアレートが対岸へ続いている。

留守番電話(電話番号04-6659)

ずでビレーはできず、確保も待機もリッジを待つ有様、もし転落すれば、カラビナに吊るされた空中ケールのようなものである。

リッジの中 300m
①—② 40m 水平
②—③ 20m 水平
③—④ 40m 60°



概念図 (2)

次のピッチは二

〇〇くらいだが、リッジは次第にやせて立つことも出来ないで、左側へ二〇ばかり降って狭いリッジを這い上がると、二、三人くらい立てる小さなテラスへ出る。

これでキレットの通過は終ったも同然である。対岸から壁のように見えた岩場は、四〇〇、六〇度くらいの岩根でザイルなしでも充分だが、油断禁物とアンザイレしたまま慎重に登る。

鎌崩側の安全なテラスでザイルを解き、やれやれと思いがら一服つけていると、空はすっかり明るくなって薄日がもれてくる。

黒木の中に笹の茂った鎌崩岳の細長い頂上を過ぎると、背の低い笹の中に岳樺やシロヤシオが疎らに生えた明るい尾根つたいになり、西の空遠く先日噴火した御岳が細い噴煙をながかせている。

笹と草地の交錯した美しい鹿の平でしばらく休み、大きな柵の茂

今年もまた上高地山研で逢いましょう！

った笹尾根を一しきり登ると、ほんの四〇分ばかりで不動岳の頂上へ出る。

二十五年振りに訪れた頂上は、笹がすっかりうすれて三等三角標石が露出し、寸又の山々は云うに及ばず、富士、上河内、聖、木曾駒、御岳、乗鞍、北設楽の山々まで見えている。時刻は丁度十時、明るい眺望を楽しみながらゆっくり昼食を済まし、ルートに北山稜にとって白沢左岸の尾根を降る。

水面まで一〇〇〇もある高い吊橋で逆河内の左岸へ渡り、紅葉の美しい林道をぐるぐるまいて作業小屋へ戻る。時刻は午後三時半、私達の到着を待ちかねるように雨が降り出してくる。

(註)

一、鎌崩キレットは寸又側に逃げみちがある。

二、丸盆岳、黒法師岳、不動岳へは天竜川の支流戸中川から登山

——海外の山から——

Mountaineer と Climber

いささか旧聞に属するが、英山岳誌の「マウンテン88号」で、British Mountain Council (B.M.C.) が昨年六月、初めての女性の国際ロック・クライミング集会を開催したことを報じていた。参加国は、ホスト国のイギリスのほか、アイルランド、アメリカ、イタリア、スウェーデン、デンマーク、ノルウェーで、外国からの参加は六カ国十二人という小規模のものであった。

一九八〇年九月にはB.M.C.の招きで、日山協は高橋善教氏ら代表六人を派遣、そのお返しとして八一年五月英代表を招いて、日英ロック・クライミングの交流をはかったが、今度はこの二月(十二日・二十六日)、氷雪技術の交流として、坂下直枝氏ら四人が派遣されているが、B.M.C.のこうした一連の積極的な技術交流に対する取り組みの姿勢には敬意を表せざるを得ない。

高橋チームの場合、フリー・クライミングが主流となっており、大量の登攀用具を持参したことで、戸惑いを感じたという。自然保護思想下の現代ロック・クライミングのあり方が示されたわけで、それなりの成果をあげることができた。

また今回は、坂下氏自身、「アイスクライミング」(イボン・シユウィナード著)を訳した関係もあって意欲的にスコットランドの氷壁に挑んだもので、坂下氏は英クライマーとペアを組んで

Glencoe の難壁の第二登を果たした。

この一連の集会のなかで「ダグ・スコットはGreat Mountaineer ではない」との発言に驚かされたという。いわば登山家の中で、Climber をけわしく分けているということだ。

坂下氏はイギリスでの講演会で、日本登山家のヒマラヤでの遭難多発の原因を指摘されたことがあるそうだが、こうしたあたりに原因がひそんでいることにも思い至ったそう。高度差二百メートル、四百メートルの岩、氷雪壁のクライミングをこなして、欧州アルプスへ。そしてヒマラヤや南米、アラスカに挑む彼らの姿勢と、三、四十歳の岩場からヒマラヤに飛び出す日本登山家の姿勢の相違である。

ロック・クライミングが出来なければ登山家ではないという積りはない。年に応じ、技術に応じた登山の方法はいくらでもある。しかし「より高く」を追求する若い人たちのためには、トレイニングの方向もかなり変わったものになるということである。国際的にはソ連での岩登り競技から、国内では国体での登山競技も長いオープン参加の時代から、天皇杯得点に加算される時代となった。スポーツ化の傾向は、一面で傾斜を深めている。このなかで女性の国際集会が初めてもたれ、これがより広く国際的に浸透することも必至である。この意味からも日本女性の参考にこのニュースを取り上げてみた。

(片山全平)

ナンガ・パルバート

柱状東岩稜登頂 (3)

一九八二・ヘルリツヒコッファア遠征隊

リッターとピオトロウスキは第五キャンプにとどまり、二日間ウエリを待った。ミュンヘンパッハは第四キャンプに降った。ベース・キャンプの私達は、頂上への登攀を視界に収め、第五キャンプの上で何らかの行動があったかどうかを見た

路があり、こちら側の方が楽である。

三、丸盆岳のガレ場にはわが国の

覚雲寺と播隆

(謎の部分を追って)

石坂 久忠

南限と思われる偃松が二、三株生えている。

播隆(幡龍)は越中国上滝村河内(富山県大山町河内)の山村の庶民の生れで諸国、特に美濃、松本、高山上宝地域の巡錫と勸進に過した念仏行者で、笠ヶ岳を再興し槍ヶ岳を開山し穂高の高峰にも登頂した、山岳念仏僧そのものであった。その播隆の祖先は貞享年代(一六八四—一六八八)の佐兵衛を祖としている。この年代は異常気象が続き、出水、七月の降雪、地震そして凶作、出水による家屋の流失破壊があったり、生活の不安を信仰に求め道場が開かれていったようである。

天保三年(一八三二)生家に贈った喚鐘にもそのことが刻まれている。「貞享頃溪水土馳道理破却助力スル者ナシ然ルニ宝永歳中至而佐兵衛申者有人作屋ヲ造営」これによって宝永年代(一七〇四—一七一〇)に至って佐兵衛によって農家形屋を建造し安住の場が得られたことを知り得る。それから代がくだって佐右衛門即ち順信の次男として天明二年(一七八二)この世に誕生したのが播隆上人である。兄は隆親と称し姉はさきとあった。

播隆が生家から隠遁した年や動機は定かではないが伝えられる諸々の説を拾ってみると

一、親類の八尾屋で家具職修業せんとしたが失敗。

二、養子先で愛妻を失い養子先を離れ遁世した。

三、覚雲寺に行き仏道を極める下地を養った。

四、穢れた現世を浄化するため念仏三昧の修行を選んだ。

五、父佐右衛門の時代に川内道場が廃止、その再興が悲願だった外にも説があるが私は先ず「三」の説を明らかにし「五」につなぎたい。

生家は古くから「川内道場(一向宗の簡易寺院)」と称する念仏易行の教域で、ここで育ったため仏道の信仰が厚く強い信心をもっていたと考えられる。隠遁の途を選んだからは、高山や上宝村まで歩を進めながらも生家に一度も戻らず行者僧としての生涯を終えた播隆であった。その播隆が越中国卯花在の覚雲寺に入った(何らかの理由で仏門に入れた)という伝えがあることから調査したところ、八尾町若ヶ原に妙覚寺という名利

めにパツイン稜に登った。この五千呎のパツイン稜の頂きから、登攀の全貌を望見することができるのは、柱状東岩稜登攀の中でも大変魅力のあるものである。このことは、また八千呎登攀者にとっても際立って特殊なことであった。

八月九日以来天候の状態は変化しつづつあった。午前七時には、もう雲塊が七〇〇呎の辺でナンガ・バルバートの東胸壁にからみついていて私達の視界をさえぎってしまった。八月十七日も同じであった。もし、山がその日のように雲でかくされてなかったら、ウエリ・ビュラーが南峰から第五キャンプに降りてくるのが見えたのにちがいない。しかし視界は第三キャンプまでで、その上はすっぽりと雲にかくされてた。午後五時、突然シヨルシュ・リッターは、半分壊れた通話器で、線の接続が不良だったと言ってきた。会話は切れ切れにしか聞こえなかった。シヨルシュ・リッターは、ウエリ・ビュラーが第二氷原に現われたことを報告してきて、彼に注意を払うよう私達も呼び続けていたのだった。シヨルシュは午後六時に再び私達を呼びだすと言った。私達が期待にみ

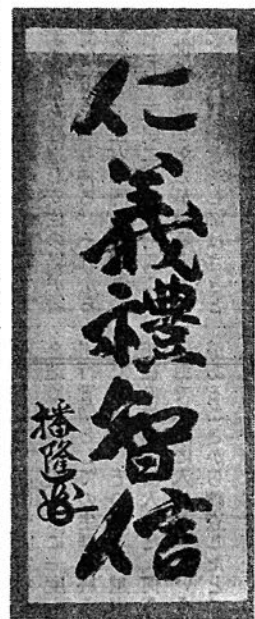


南峰(8042呎)/ヘルリッヒコッファー氏提供

ける酸素の欠乏のために、論理的な思考や結論からは完全に脱落していたが、それでもヘルマン・プーは自分の目的を達し、第五キャンプまで自力で降ってきたのだ。ウエリ・ビュラーは、雪洞を掘って極寒の一夜を明かした後、一九八二年八月十七日、午頃、単独でナンガ・バルバートの南峰、八〇四二呎に到達した。加うるに、彼はシヨルシュ・リッターが南稜の七〇呎下までつけていたトレ

ちて待っている間、シヨルシュはビュラーに叫びかけ、第五キャンプに真直ぐ誘導しようとしていた。ウエリは始め右側に遠くそれてしまい、次に左側に遠くそれてしまっていた。ウエリがシヨルシュを見て、テントを確認し、第五キャンプに向かつてよろけこんでくるまでシヨルシュは叫び続けた。ウエリは高山病にやられ、彼の心は幻覚に悩まされていた。彼はかなりの凍傷を手と足に受け、南稜のすぐ下で不屈のアイズ・ビバークを続けたが、体力の限界にきていた。このビバークはかなり彼の体力を弱めたが、南峰に到達しようという彼の精神力まではおかされなかった。

このことに関連して、私は一九五三年の最初のヒマラヤ遠征を思い出す。この時、ヘルマン・プーは高山病にかかり、幻覚と強迫観念に悩まされた。そして彼は立ったままのような状態でビバークをしたが、この北の肩のビバークは、まだまじな気温であった。彼は何としても頂上にいこうという目的を持っていた。この目的は脳の中にしっかりと組み込まれていて、彼の肉体は、単にこの脳に支配される道具にすぎなかった。高所にお



大和屋に現存する播隆の書

があり、この妙覚寺の寺中(末寺)に覚雲寺あった。

妙覚寺は文明元年(一四六九)の創立、妙覚寺過去帖の文中に「幡龍」の文字も発見し得る。この人物が覚雲寺に名をとどめるのは寛政年代から享和年代(一七八九～一八〇三)までの十数年余りの期間である。

妙覚寺の近くには若ヶ原八幡社があり、その社の御神体に木像がある。手相が仏形になっているという。覚雲寺の幡龍の刻と伝えられている。誠に奇妙なことだ。

寺伝によれば安政五年(一八五八)二月当地方に大地震(マグニチュード六・九)があつて経蔵、鐘樓などが倒壊、時に覚雲寺も同じ状態にあつたものと考えられる。当時の詳細は知り得ないが、年代が下つて慶応二年(一八六六)妙覚寺十五世浄照師が覚雲寺の再建に取り掛かり翌三年に立派に完成された。その時の住職(住持)は消雲であつたという。

明治三年(一八七〇)に至るに及び富山藩令による合寺の布令によつて一宗一ヶ寺を残すことにな

る。ここにおいて残念ながら覚雲寺の寺名は消され廃寺となる運命におかれた。僧達はどうなったのだろうか？

ところで「幡龍」は仮に別人であるにしても、覚雲寺の寺名は明確で諸説「三」を満足させるものが存在している。

河内に川内道場があつた頃、各地に道場があつたようだ。亀谷村にもあつて亀谷村の部落の多くの道場の中心は西方寺であつたらしい。川内道場のあつた中村家(播隆生家)は近隣の集落の水須、小原、河内、安蔵、隠土、赤倉、越谷などの部落の信仰の指導的役割を果たしていた。中村家の菩提寺は覚証寺(富山市西四十物町)



播隆上人顕頌碑

の心をつつたものもあつたことであろう。或る日河内の部落から忽然と姿が消えたように伝えられていたが、時代的、地域的、社会的背景も隠遁の一因であつたのであろう。

十二歳頃(寛政五年

一八三二年、私の義兄弟、ウィリー・メルクルの第一回ドイツ ナンガ・バルバート遠征を記念

で、播隆の願により川内道場再興の認可を得たのは天保二年(一八三二)であつた。

「僧衣一代限り着用することと認可す」と記している。念願の川内道場の再興が成つたのである。

河内部落近在は土地の生産性が低かつたためか部落戸数の制限を受け、水須部落は四五石十三戸以上を禁じ、河内部落は四三石九戸内外に制限、小原部落は六五石余であつた。この状況からして次男以下の現地における分家は極めて困難視され、故郷を去らねばならない運命をせりながら、道場での

仏教感化に伴う少年の心を揺つたものもあつたことであろう。或る日河内の部落から忽然と姿が消えたように伝えられていたが、時代的、地域的、社会的背景も隠遁の一因であつたのであろう。

しての今回の遠征は、頂上征服の成功裡に終つた。この遠征をもって、ヒマラヤとカラコルム地域における二十九年にわたる私の調査行は終る。十回にわたつてナンガ・バルバートに集中的な遠征をし、二回ラカボシに、二回エベレストに、そして一回ずつブロード・ピークとカンチェンジュンガに遠征した。健康上の理由から、私はこれ以上ヒマラヤ遠征隊を出さないだろう。

今後は私の余生を私の患者と科学の研究の仕事に捧げる積りだ。(完)

△一七九三(前後)、覚雲寺の小僧(小坊主)となり、同八年頃覚雲寺や妙覚寺の許しを得て山城国下鳥羽一念佛堂上人の弟子となり「播」の字を貰ひ修行専一、その翌年宝泉寺(阿辺峰)の見仏上人の下で得度、仏岩と改めた時代もあつたと思われる。そして文化年代に至つて修行の志を求めて覚雲寺を辞し、両親の許しを乞い、僧として衆生済度を求める出家修行に一生を捧げたものと考えられる。それは二十四歳～二十六歳の時と思われる。

かくして播隆は修行をかさね文政元年(一八一八)に「諸宗皆祖念仏正義論」を生家に贈り、仏門における念仏一筋に生きようとする心情を書いて、その決意をあらわしている。

中村家には播隆の遺墨や遺品の数々が現存しているが、その外に遺墨等の甚だ少ないのに驚く。それもそのはずで巡錫の地になつたからであらう。でも六字の名



図書紹介

二高山岳会会報

第二高等学校山岳会会報第一号

より第七号、朝日特集号、蔵王山登山要録、アジア内陸踏査探検文獻抄、以上のコピー複製本が佐々会長を通じて東北大学の会より本会に寄贈された。主な内容は次の通りである。

第一号(昭和五年八月五日発行)

飯豊山・我等の山行を愛する道(沼井鉄太郎)、松山沢見(杉原五郎)、丸森峰と地紙山(三田博雄)、笹谷峠(佐々保雄) ほか。

第二号(昭和七年六月三十日発行)

山と歌(佐々保雄)、雁戸山から関山峠まで(久野久)、三月の飯豊山(大島正隆)、実川を溯りて(田名部繁) ほか。

第三号(昭和十三年十月発行)

清溪小屋建設報告(桜井清八郎) ほか。

第四号(昭和十六年発行) 飯豊特集号、飯豊山の問題(伊東信雄)、

夏の各沢、大又沢(山県登)、松山沢(野口義孝)、梅花沢(佐藤春郎)、胎内川(階川広水)、積雪期の試登、三月の牛首山、大日岳(佐々保雄)、厳冬期の飯豊山(桑田欣吾)、檜山沢より大日岳(桑田欣吾)、飯豊山登山年表 ほか。

第五、六合併号(昭和十八年六月二十日発行) 我等の叙事詩(沼井鉄太郎)、朝日岳登山(山岳部) ほか。

第七号(昭和二十三年七月発行) 飯豊山ダイグラ尾根・三月(葛西森夫)、クサイグラ尾根より大日岳(葛西ほか)、雁戸山遭難捜索報

告(斎川慶一郎) ほか。

蔵王山登山要録(昭和十二年十月二十六日・二高同志会山岳部発行) 概

説、登山、積雪期以外の登山、冬の登山、登山施設、二高清溪小屋に就て、(付録) 蔵王山第一輯、蔵王火山の地質及び火山活動史(久野久、三宅輝海)、葡萄酒湖行記(丸山進) ほか。

二高山岳部報朝日特集号(昭和十六年七月二十五日発行) 第一部登山記録、春の朝日岳(佐藤春郎)、第二部朝日岳と僕達 ほか。

アジア内陸踏査探検文獻抄(一九四三年、一九四四年)

まずこの立派な文獻をコピー、製本されて本会に寄贈されたことに對し厚く御礼を申し上げたい。一号から三号まではガリ版印刷で、四号から活字印刷となっていて、このような稀少文獻が全部そろって再製されたことはまことに有意義なことである。四号の飯豊山特集の昭和十二年一月厳冬期初登の記録や、朝日特集号でまとめられている昭和十六年三月の朝日岳での行動など、登山史的にみてもきわめて貴重なものである。

また昭和十八年、十九年二高山岳会特別号として出されたアジア内陸踏査探検文獻抄は山県登氏によりまとめられたきわめて充実したものである。

本会図書室では戦前の各大学、高等学校山岳部の会報を全部そろえたいと思っているが、なかなか

か意のごとくならず、かなりの欠本がある。二高山岳会からの寄贈を機会に、この点にもっと力を入れたいと思う。

(山崎安治)

シルクロード詳図

(二百萬分の一)

蘭州からアラル海まで

関口精一著

東西約四十・メートルのシルクロードと呼ばれる地帯を四等分し、B四判半載(七八・八センチ×四五センチ)に各々収めたものである。東は甘肅省蘭州から、西はトルクメン共和国アシハバード、アフガニスタンのヘラートまでを一堂に並べてみると、多くの紀行文の巻末に付いているルート図からはうかがうことができない迫力がある。

茶色一色で印刷された新疆ウイグル自治区のタクラマカン砂漠、ジュンガル盆地、ソ連中央アジアのカラクム砂漠などに水色の一筋の川が流れることにより地名が点々と記入されていく。川(水)と人々の生活とのかかわりがいかに大きいかが、地図の上からも歴然として見える。

歴史的な主要都市の旧名、漢語名なども別枠に記されていて著者の苦勞が偲ばれる。と同時に錯綜している部分の記入、日本語にない漢字など印刷所の努力も多大である。

こみ入った部分の地名、川の名、

離れて書かれていところなど一部読み取りにくい部分があること参考文献、出典などが記されていないので、多少納得がゆかない部分もそのまま終らせてしまわなければならないことなど、非常な勞作であるだけに残念に思う。

Kmや各国固有の距離の単位、中国里、マイル(ソ連)、ファルサング(イラン)の縮尺が切り取ってあてがうことができるようになっているのは古い文獻を読む時に便利だろう。

日本との大きさの比較用地図付。一九八二年二月発行 二五〇〇円(四枚一組) (泉 久恵)

登山入門

近藤信行著

岩波ジュニア新書シリーズの一冊。アカデミックな出版物の多い岩波書店で出したものにふさわしく、登山を文化的な面から捉え、解り易くまとめ、人間と山とのかわり合いにも日本の風土を尊重する著者の姿勢が窺え、かつ山登りから得た貴重なものを実社会に生かすといった巻末の表現には、逃避的でない、健全な社会人を求める姿勢があり、ジュニアが読むには最適の入門書のように思われる。

船乗りも、死ぬ時は暈の上で死にたいものだ、と聞かされたことがあるが、人との繋がりあつての山登りであれば、人を悲しませる

ような山登りは、極力減らしてゆくの筋というものだろう。一九八二年七月二十日 岩波書店刊 五八〇円 (岡沢祐吉)

カラコルム登山報告書

ユクシン・ガルダン・サール七五三〇

神代高校山岳部OB会

カラコルム登山隊

表題の通り、ユクシン・ガルダン・サール峰は七五三〇。カラコルム山脈、ヒスパー山塊に属する未登峰。登るべき山である。本報告書は本文二四頁、簡にして要を尽くした報告書と云ってよい。内容は以下の通りである。

御挨拶——ユクシン・ガルダン・サール敗退の記——隊員紹介——カラコルム・自然と人々——遠征隊日誌——行動記録——遠征を終えて(回想)——会計報告——協力者名簿——編集後記。

さて、ヒスパー氷河側からのユ峰へは、クンヤン氷河を経てアッパ・ヤズギル氷河を縦断しなればならない。本氷河の「ツメ」がユ峰の基部となるからである。ところが、ク氷河からア氷河に至るには平均傾度六〇度、高距六〇〇以上の氷壁を越える必要がある。そして、ア氷河のツメには標高六〇〇〇以上にある本氷河雪原を更に十六・メートル廻らなければならぬのである。

本登山隊は一九八一年六月二十

三日のBC(五〇〇〇前後後)集結後、七月二十七日にア氷河を縦断しユ峰基部(六三〇〇〇)に達した。そして、翌二十八日に登頂を試みたが、六八〇〇前後で断念している。最後まで悪天候にわずらわされた山行と云ってよい。

本報告書はこの間の事情を淡々と文章論的には疑問のある箇所もないではない——綴り、嫌味がない。この結果、本報告書はユ峰の登山資料としても貴重な記録となっている——但し、高度標示はよりコマメにすべきである——

ところで、本登山の母体であるOB会代表の川口氏は、「半年間の離職は行きたい者総てが行ける期間ではありません。行けた者こそ幸運であり、より努力した者であります(一頁)とし、大竹隊長は本登山について、「結果的には頂上へ到達できなかったのは天候に恵まれなかったせいばかりではなかったと思う。隊の総合力が六八〇〇という数字で示されたのであり、その評価は別としても、何にも増して喜ばしいのは全員無事下山できたことだと私は思う(三頁)」と記している。いずれも聞くべき言葉であろう。

最後に私事の一つ。本ユクシン峰は私も同年度に登頂を企てており、実は本登山隊以前にその登山許可を取得していた。ところが、諸般の事情によりわれわれの計画

自体が瓦解し、結局私はこの山を一見もせずに引き退がったのである。決して強力とは云えない本登山隊がかように貴重な登山をなし得たことを読むにつけ、私は自戒の念を覚えずにはおれなかった。本登山隊に敬意を表しつつ、自らの不甲斐なさを恥じた次第だ。

一九八一年 神代高校山岳部OB会 カラコルム登山隊事務局 刊

せふり

福岡山の会創立
50周年記念特集

昭和五年十一月、福岡山岳談話会発足から二年をかけて難産のすえ、福岡山の会が福岡市に呱呱の声を挙げ、本年度五十周年を迎えた。その記念特集号である。

同会は創立以来ハイキングからヒマラヤをモットーに登山を実践、幅の広い山行を行なっている。この会には所謂「OB」がいない。当然といえば当然だが年令に応じた「現役」が、より高く、より深い登山を追い求めていることである。これが五十年つづいて来た所以ではなからうか。

脇坂会長は挨拶の中で「日頃のトレーニングを怠らず、年老いても心掛けて頂きたいものである」と述べておられるが、この息の長い山行こそが同会の真骨頂ではある

まいか。ちなみに同会長は、本年古稀を迎えられるとのことだが、同時にマッターホルン第十登目を狙っておられる由。

巻頭に五十年の歩みとして、創立からこんにちまでの同会の動きが抄録され、同会の動きが一目で判る。とくに冬山は、戦後の昭和二十三年にいち早く復活、以来毎年一回の休みもなくつづけられ、これが原動力となりネパール・ヒマラヤへ二度の登山隊を派遣等、毎年誰かが海外で行動している。

初代会長の竹内亮氏が「七十年前の「白山」登山記(抄)」を寄せられているが、当日の描写、とくに植物については「試みに予の眼に映せし種類を列記せんか」として、十数種の花の名を挙げ「この深山の花誰がために美芳ぞ」と、花に風景に酔われた同氏の名文がある。同時に当時の同登山路の花の分布図も窺い知ることができる。さらに白ペンキの広告大文字に「何たる俗ぞノ嗚呼何等の醜ぞノ深山の神聖はまさに傷つけられんとす。嗚呼」と、心ない人によって書かれた白ペンキ文字に自然を汚すことの憤りを感じた文章がある。

五十字提言「今後の福岡山の会に望む」は、二十一年から山行、会の運営等に、半世紀を節目としての示唆にとんだ積極的な提言が寄せられている。

山がスケッチにより初代会長の竹内亮氏から紹介されている。氏のスケッチは、スウェン・ヘディン張りの独得の絵で親しみを覚える。

その他厳冬期前穂東壁、鹿島槍北壁、ダウラギリ登山、笠ヶ岳、カンジロバ登山隊、マッターホルン



ネパール政府 観光大臣一行歓迎会

この度、ボハラ観光大臣、シャルマ観光局長、ボカレルヒマラヤ旅行社社長、シンネパール旅行協会の所長の四人が、中国での旅行関係の会議のあと日本に立ち寄られました。突然のことで準備もそこそこ日本山岳会としての歓迎会を三月六日(日)夜六時より国際文化会館で開きました。佐々会長、西堀前会長、田口副会長や紅一点の田部井会員、八千峰冬期初登頂したダウラギリ北大登山隊長長安間氏に加え、来期カンチエンジュンガに出かける若い人達を交えて英語での懇談、落着いた会館の庭園が会を一層盛り上げ、なごやかなうちに散会しました。なお、

ン連続二回登頂、剣岳等がある。最後に五十年を記念して作られた会歌が譜とともに添えられている。

B5版アート紙八四頁 昭和五十七年五月 福岡山の会発行 (稲永 篤)

当日は勤労者山岳連盟の森田会長、豊田理事長の来席をいただきました。

出席者 ボハラ観光大臣、シャルマ観光局長、ボカレル氏、シン氏、労山森田会長、豊田理事長、佐々、西堀、田口、高橋、田部井、安間、中川、長谷川、平野、西村、三辺、前田、伊丹、鹿野、神崎。

ブータン政府観光担当者 ドルジェ氏歓迎会

三月三日(木)、四番町の「トレ」の泉でドルジェ氏と昼食を伴にしながらかん談した。

日本語で話さないのが奇異に思われるくらい、ドルジェ氏は日本人に似ており、新入会員の歓迎会のようにさえた。

出席者 HAJ 山森、尾形、角田、木村(通訳)。JAC 佐々、田口、小原、中村、高橋、鈴木、斎藤、高田、広羽、関塚、神崎、伊丹、中川、坂本、村木、河村、菅原、前田、黒川、北村、岡、橋本、三辺、岡沢。



ドルジェ氏歓迎会 撮影・斎藤健治

三水会の恒例行事二つ

山あいの青ヶ久保駅はひどく寒かった。丸山登山口から雪を踏みようになり、暖冬がうそのようである。背後の武甲山や、それに連なる奥武蔵の山なみが白く輝いている。積雪は二〇センチあまり。風が強いので長く休んでいられない。

丸山分岐から少し下ると広大な「埼玉県民の森」があった。シーズンオフの今、各種の施設も閉ざれ、いかにも寒々としている。われわれも追いたてられるように新木鉱泉に急ぐ。秩父盆地を望みながらの下降は意外に長く、鉱泉宿に着いた時には黄昏が迫っていた。

翌日はいったん秩父駅にでて、寄居経由で東武竹沢駅下車、官の

倉山に向かう。前日とはうってかわったひどく暖かい日である。家族コースといえながら最後の十数分のツメは、深山の趣きがあつて一汗かかされた。小川町に下って今回も名物忠七めしがしめくくりとなった。とき 一月二十二〜三日。

参加者 鶴岡元之助、坂倉登喜子、斎藤健治、高橋晋作、木村俊博、沖永裕、岩堀瑞子、小林由美子、荒野康子、高田真哉 他九名

竹寺の大野住職より、降雪のため今回の集いは見合わせて欲しいとの困惑電話である。山深いお寺のこと諦めざるを得ない。そこで坂倉さんが奔走、飯能に宿を確保することから始まった。

会場変更ながらもヒマラヤ・トレッキングに参加した原田さんの話しや美しい写真、小野さんのヒマラヤの追い剥ぎ撃退の話などが披露され、実に面白い集いとなった。

翌日は適当に雪を踏みながら天覧山から多峰主山を往復、奥武蔵名産献上飯能そばも賞味、飯能駅で散会となったが、有志は更にユガテの里を訪れた。とき 二月十九〜二十日。

参加者 鶴岡元之助、今井喜美子、坂倉登喜子、原田幹市、進藤波男、川上光久、小野利次、伊藤美恵子、高田真哉 他六名。
(高田真哉)

会員通信

拜啓、日英登山技術交流の一環として、スコットランドのアイス・クライミングを英国の気鋭のクライマー達と楽しんでおります。スコットランドは俗に「Fair Country」という吹雪の日が多いというところでしたが、幸運にも天気続き、Cairn Gorm, Carg Meg・自然保護・

「山を美しく保つためのフィールド

マナー・ノート」の配布について

自然保護委員会

美しい自然は人間の心の拠り所であり、人類生存の原点でもある。このような自然を人工による破壊と汚染から守り、微妙な自然の平衡や調和を保って行こうという運動は以前からボランティアの間でも提唱されていたが、現在のように人口の増加と文明の発達が進み、急激な環境の変化が見られるようになると、環境保全の問題はもはや一部の人間に任せておくべきでなく、凡ての人間が真剣に取り組むべき問題であると考えられる。

現在僅かに残された未踏の山地や汚されない渓谷は、この意味で全人類にとっての貴重な宝といえよう。そして冬山登山者による奥又白や劔三ノ窓のゴミ、あるいは日本遠征隊のヒマラヤ、アルプス、

haidh, Lochnagar と、連日五級の氷壁を登り、今日は Ben Nevis の Fort William に移動します。当地の登山家達の登山倫理の厳しさは改めて感服しました。まだまだ修業が足りぬと冷汗の出る思いです。(二月二十日、グレン・モア・ロッジにて 坂下直枝)

ハ田口二郎氏あて

アラスカにおける残置装備などが大きな社会問題、あるいは国際的信用の問題になっているのも当然である。何げなく捨てた空缶やビニール袋、あるいは岩壁に打残した一本のハーケンが、如何に多くの山から美しい山の景観を奪い、後続のパーティーからフリークライムの楽しみを奪うことになるか、深く反省すべき時期である。日本山岳会々員は少なくとも今後決して山を汚さず自然を破壊しないというこに、何よりの誇りと義務を感じて行きたいものである。

このような願いから、当委員会では、今回「山を美しく保つためのフィールドマナー・ノート」を作り、自然保護全国集会でも検討の上、四月中旬頃全会員に配布することになった。その内容はなか

なか厳しいものではあるが、山に登るものとして今後は非実行して行くべき事柄であり、その気になれば実行可能な事柄なので、よろしくご協力をお願いしたい。そしてノートの趣旨を会員外にも、さらに登山中まわりの人々にも徹底PRして頂くことを心から期待する。

もちろん各項目はそれぞれ微妙な内容を含むものであり、表現の十分な点も多い。お気付の点や積極的なご意見を当委員会までお知らせ願いたい。またノートの奥付にも記されているように、今回はJAC会員を対象としたもので、もっと広い一般団体の登山の心がけは来年度改めて編集印刷の予定である。その場合表現は少し変わるはずであるが、山を美しく保とうとする本質的な点に変わりはない。これらのためにも積極的なご教示をどしどしお寄せ下さるようお願い申し上げます。
(中村純二)

携帯灰皿頒布について

自然保護委員会
総務委員会

今回配布の「フィールドマナー・ノート」には、携帯灰皿を携行し、たばこの灰や吸い殻は必ずこれに捨てて持ち帰ることが要請されている。総務委員会ではこれに呼応して、新たにJACマーク入

お知らせ

○行事案内

☆総会 五月二十一日(土)

私学会館(東京 市ヶ谷)

会員各位のご出席をお願いいたします。

☆会員・支部懇談会

総務委員会

残雪の富士、広大な駿河湾の絶景を見ながらのハイキング。前夜は日本平山麓、鉄舟禅寺にて宿泊懇談。静岡支部の協力を得て現地会員懇談会を開きます。特に支部会員の皆様の親睦をはかりたいと思いますので万障お繰り合わせの上、ご参加下さい。

期日 昭和五十八年五月二十一日(土) 二十

二日(日)

会場 鉄舟禅寺(清水)

内容 一、親睦懇談会

二、禅定

三、ハイキング 日

集合 鉄舟禅寺 午後五時

総会参加者及び東京出発者は、総会終了後会場よりバスにて出発(詳細は案内状をもって連絡いたします) 問い合

☆東北各県支部会員親睦会

五月二十八・二十九日

会場・宮城県金華山

会費・六千五百円

開合わせは宮城支部まで
☆ウェストン祭 信濃支部
六月四・五日

今年もまた上高地に集いましょう。

☆山菜山行

六月十一・十二日

越後支部の協力を得て守門岳で行ないます。

講師・片岡 博氏

宿泊・入広瀬 松屋旅館

会費・会員 九千円

非会員一万二千元

一泊三食付・交通費別

東京からはバス(五十名・運賃未定)を用意します。なお、

片岡講師を招いて「山菜勉強会」を五月三十一日六時半より

ルームにて行ないます(会費三百円)。山菜山行に参加できない方も出席できます。

☆静岡支部総会 六月十一日(土)

☆役員懇親会 総務委員会

年度が変わると会員番号も一〇〇〇番台になります。日本山岳会の運営・活動も内外ともに多様性をきわめてまいりました。役員間のコミュニケーションをはかり、合理的な会運営を考えるために、親睦をかねた研修会を役員懇談会の名称で静岡(富士ハイツ)で開催いたします。

期日 六月十八日(土) 十九

日(日)
内容 理事評議員会
支部長懇談会
委員会会議
新役員懇談会

集合 渋谷駅 東急文化会館前、六月十八日午後一時半または現地集合

○会室行事案内

☆海外委員会の講演会

〇五月十二日(木)

「ドイツ山岳会のこと」

スライドとお話しー

〇六月二日(木)

講師 池田常道氏

☆会員懇談会

〇六月 日時未定

自然保護委員会の「フィルム

ドマナー・ノート」の説明

があります。

☆大学指導者会議

六月 日時未定

青年懇談会・学生部が行な

います。

☆映画と講演の会

六月二十五日(土) 三・五時

講師 三田幸夫氏

講演 昭和六年

映画 カシミールの旅

クル溪谷からロータ

ン峠(三田幸夫氏撮

影) フィルム委員会

りの携帯灰皿を作製し、一ケ500円で頒布することになった。喫煙される会員はもちろん、親しい山仲間への積極的なプレゼントとして、この際精々ご利用願いたい。

・報告

新年集會

福島支部

本年は暖冬に明け、吾妻、安達太良の峰々は未だに初冬の様相で、スキーの手入れ、ツアーの計画等、手につかない正月であった。そのうさを晴らすべく恒例の支部新年会を二月十日福島市内えびすグランドホテルで盛大に開催した。年度後半の主なる左の行事を報告する。

九月 秋田支部主催の東北ブ

ロック懇親登山参加 十五名

十月 吾妻山浄土平周辺の清

掃登山参加 十四名

十一月 秋山小集會、飯豊山麓

飯豊鉱泉 十五名

十二月 年次晩餐会 六名

続いて長老の斎藤音蔵幹事の音

頭に乾杯、酒宴に入る。行事の

思い出、物故者の懐故等、時間の

経つのを忘れ杯をくみかわす。

昨五十七年は支部創立三十五周

年であったが、諸般の事情で何も

実施出来なかったが、遅ればせな

がら、次の案が提出された。

安達太良の懐に利用度の高い、

くろがね小屋がある。そこにぶら下がる鐘が材質上(硫黄のため)腐蝕激しく、数年前から新規調達を関係筋に申し入れていたが、今回たまたま支部会内にて鐘の設計、製作が可能なることがわかり、JACのマークを鑄込み、真鍮にて製作をする。

前記くろがね小屋のみでなく、吾妻山の吾妻小舎、慶応山荘にも寄贈し、登山者の便宜を計り、遭難対策に寄与する。実施に当って至急委員会を構成し募金及び発注をする。なお記念のため希望者には実費にて頒布を考える。

以上大変有意義な行事を決定し夜半、次の集會を約し解散する。

出席者 松久秀夫、斎藤音蔵、後藤泰治、高野喜七、古市義孝、河上銀治、相模八郎、安藤治、八巻和男、渡辺千代蔵、佐々間高男、野地克也、寺島昭一、二階堂匡一郎、伊藤義男、広瀬由昌、中嶋正夫 (中嶋正夫)

会務報告

3月理事会

3月7日午後6時30分

本会ルーム

出席者 佐々会長、渡辺、田口副会長、神崎、伊丹、西村、川上、岡沢、赤松、小倉、水野、鈴木、中村、菅沢、大倉、河村各理事、松丸、小原、大塚各評議員、太田、小倉各監事

☆三水会例会

○五月十八日(水)

佐々保雄氏の講演

「アリューシヤンの夏」

○六月十五日(水)

「山小屋の主人が語る最近の登山者気質」

問い合わせは各委員会、または事務局、集委員会までお願いいたします。

●山研開所のお知らせ

上高地山岳研究所を四月二十九日(金)に開所致します。

山研も四十九年六月十日にオープンし、お陰様で十周年を迎えることが出来ました。その間利用者数は五、六八六名の多数となりました。

管理人も開設以来お世話になった津村ご夫妻に替り、昨年より島田ご夫妻が皆様の来所をお待ちしております。

島田さんは軍隊生活が長く、どちらかと云うと無口ですが非常に親切で心のやさしい方です。一方奥さんは明朗闊達なおばさんで似合の夫婦と云う処です。

ここ二、三年の利用状況を見ますと非会員の利用が年々少なくなっていますので、ご家族、友人等おさそいの上、大いに

アンケートのお願い

三月の理事会の決定により「アンケート調査特別委員会」が設置され、全会員を対象としてアンケート調査を行なうことになりました。アンケートは総会通知と同封送いたしますので全面的な協力をお願い致します。

利用願います。また、会員のご紹介があれば非会員、単独利用も結構です。

なお、今年の利用料金は昨年同様据置きと致します。

利用料金

会員 一、八〇〇円
非会員 二、八〇〇円
小学生 一、〇〇〇円
幼児 八〇〇円

食事

但し御飯、味そ汁のみです。副食は各自持参下さい。

利用申込先

現地(〇二六三九五) 二五三三
(山研委員会・鈴木雄二)

◎第二十一回

木暮理太郎翁

碑前懇親会のお誘い

新緑の候、例年により、山菜のはしりを味わいながら、一夜を楽しく語り合いましよう。

本年は第二日目、甲斐駒ヶ岳、八ヶ岳の展望台、白砂の雁ヶ原(日向山)に記念山行。そのあと、麓のサントリードイステイラリーでウイスキーの試飲と、バードウォッチングを楽しみたいと思います。

次の要領で実施いたしますので沢山の会員のおいでをお待ち申し上げます。

日時 五月十四日(土)

場所 山梨県北巨摩郡須玉町金

宿泊 右同所 有井館

電話 0557-450501

会費 七千円。日向山に登る方は八千円。

申込 五月九日までに、本会ルーム事務局 定員四〇名

現地責任者 〒400 甲府市武田三丁目六二七 山村正光

実施要領 五月十四日、十六日より、木暮碑前祭 同十八時より、懇親会。五月十八日現地発、車にて、甲斐駒ヶ岳の麓、尾白川林道に入る。ハイキング道を徒歩一時間半、日向山(一六五九・六)着、中食後下山、サントリードイステイラリーにて休憩。再び車にて時刻甲府駅着。解散。

委任・欠席 田村、高本、松家、高橋各理事、佐藤、村木各評議員

◎報告事項

▽連絡事項四件(総務) (1)ヒマラヤ協会より会報の交換要請。(2)ブータンよりドルジェ氏来日、三月三日に昼食会をもって歓迎。(3)ネパール観光省要人四名来日、三月六日、会長外二十名出席し歓迎会を行なう。席上いくつかの話題がだされた。とくにネパールが計画中の山岳博物館に対して、JACも物品、情報の提供による協力を約した。(4)昭和五十八年三月、六月までの行事日程の確認。

▽各委員会報告三件 (1)山研委より四月二十九日開所、料金据置。(2)山岳編集委より故大島亮吉氏のピッケルを本会に寄贈していただく話が進行中。(3)集会委より今夏インドヒマラヤZ1峰登山計画(集会委員五名参加)の説明。



◎審議事項

▽昭和五十八年度予算案の改訂について(財務担当) 前回の理事会において審議未了の四つの課題をとり入れた予算案の追加支出の

検討案が提案され、審議を行なう。結果、①会員に対するアンケート調査を総会通知とともに実施する。この仕事のために実行小委員会(委員長小倉厚理事外七名参加)を設けて、来る六月中旬までに集計・整理完了を目指す。経費約二〇万円、と②映写機整備の件五万円。以上二つが認められた。▽昭和五十八年度改選役員候補の推薦の件 理事会、評議員会の役割について、JACの長期展望等について討議を行ない、結論として、三月七日の評議員会に、理事会でのテーマと話題になった会員とを報告し、評議員会で新理事の推薦をうけることにした。

ルーム日誌

(58年2月)

21日(月)	総務委、集会委
19日(土)	山岳図書を語る夕べ
19日(土)	本展
17日(木)	婦人懇談会
16日(水)	三水会
15日(火)	会員懇談会
14日(月)	明大 総会
10日(木)	フィルム委
9日(水)	学生部集會
8日(火)	図書委
7日(月)	理事会
5日(土)	ウム
3日(木)	指導委
2日(水)	海外委講演会
2日(水)	高所登山委シンポジ

図書受入報告(2)

図書委員会

昭和 57 年 8~12 月分受入図書(つづき)

- 47 Rose Lesser "Typhoon and..." 1982 (西堀栄三郎氏寄贈)
- 48 Club Alpino Italiano "Statuto e Regolamento Generale" 1982 (編者寄贈)
- 49 Pierre Bossus "Les Cinquante Premières Années de L'Union International des Associations D'Alpinisme" U.I.A.A. 1982 (版元寄贈)
- 50 Albert Smith "The Story of Mont Blanc" David Bogue 18 (John Coales 氏寄贈)
- 51 J.E.Q. Barford ed. "Climbing in Britain" Penguin Books (John Coales 氏寄贈)
- 52 Owen Glynn Jones "Rock-Climbing in the English Lakeland" Abraham and Sons 1900 (John Coales 氏寄贈)
- 53 Karl M. Herrligkoffer "Kampf und Sieg am Nanga Parbat" Bayerische Verlagsanstalt GmbH 1979 (Herrligkoffer 氏寄贈)
- 54 Raymond Bridge "The camper's guide to Alaska, The Yukon, and Northern British Columbia" Charles Scribner's Sons 1976 (Brian L. Gannon 氏寄贈)
- 55 Paddy Sherman "Cloud walkers: six climbs on major Canadian peaks" The mountaineers 1979 (Brian L. Gannon 氏寄贈)
- 56 Gene W. Mason "Minus three" Prentice-Hall 1970 (Brian L. Gannon 氏寄贈)
- 57 David Roberts "The mountain of my fear" Vanguard 1968 (Brian L. Gannon 氏寄贈)
- 58 Raymond Bridge "Climbing: a guide to mountaineering" Charles Scribner's Sons 1977 (Brian L. Gannon 氏寄贈)
- 59 Joe Wilcox "A reader's guide to the hall of the Mountain King" 1981 (Brian L. Gannon 氏寄贈)
- 60 Terris Moose "Mt. McKinley: the pioneer climbs" The Mountaineers 1981 (Brian L. Gannon 氏寄贈)
- 61 Joe Wilcox "White winds: America's most tragic climb story and documentation" Hwong Publishing Co. 1981 (Brian L. Gannon 氏寄贈)
- 62 W.R. Neate "Mountaineering and its literature" Mountaineers 1980 (Brian L. Gannon 氏寄贈)
- 63 Allen Steck and Steve Roper ed. "Ascent: the mountaineering experience in word and image" Sierra Club 1980 (Brian L. Gannon 氏寄贈)
- 64 Allen Steck and Steve Roper "Fifty classic climbs of North America" Sierra Club 1979 (Brian L. Gannon 氏寄贈)

氏寄贈)

- 65 Bradford Washburn "A tourist guide to Mount McKinley" Alaska Northwest publishings 1976 (Brian L. Gannon 氏寄贈)

吉阪家 寄贈図書

- 1 京都大学学士山岳会編著 チョゴリザ 朝日新聞社 昭和 34 年 10 月 25 日
- 2 中尾佐助 ヒマラヤの花 毎日新聞社 昭和 39 年 8 月 20 日
- 3 朝比奈菊雄編 山なみ 茗溪堂 昭和 30 年 7 月 15 日
- 4 三田幸夫 山なみはるかに 白水社 1954. 7. 20
- 5 辻村伊助 スウィス日記 横山書店 大正 11 年 8 月 1 日
- 6 古田伝一・久留島秀三郎 馬賊・鞍山の思ひ出 久留島秀三郎 1967. 12. 20
- 7 渋谷敏三 南米通信 角川書店 昭和 33 年 8 月 20 日
- 8 ジョン・イェーヴァー・福田実訳 白い砂漠 朝日新聞社 昭和 31 年 11 月 25 日
- 9 小島六郎編著 ベテガリ岳遠征記 サン書房 昭和 23 年 7 月 20 日
- 10 坂部護郎 はるかなシュプール スキーと共に 60 年— スキージャーナル 昭和 51 年 12 月 20 日
- 11 白山連峰
- 12 Sir Francis Younghusband The Epic of Mount Everest 1938
- 13 Apocket History of Zermatt
- 14 Captain J.B.L. Noel THROUGH TIBET TO EVEREST 1927
- 15 John Hunt The Ascent of Everest 1953
- 16 Scott Russell Mountain Prospekt 1946
- 17 Ardito Pesio Ascent of K 2 1955
- 18 Prof. ir. S.J. van Embden International Society of city and regional planners
- 19 State of the profession 1970
- 20 First over Everest 1933
- 21 Maurice Herzog Annapurna premier 8000 1951
- 22 Eric Shipton Sur cette Montagne 1950
- 23 Jean Escarra Karakoram 1936
- 24 Les Alpes 1958
- 25 Forschung am Nonga Parbat Deutsche Himalaya-Experition 1934 1935
- 26 Karakoram and Western Himalaya —Plates and Maps—
- 27 朝日新聞社南極学術探検事務局作製 IGY 南極観測事業報告(上, 下, 付録)

第 5 回 ~83・<7/29(金)~8/12(金) 15日間>

ソ連・カフカスの山旅

○名峰エルブルース山(5,633m)登頂
○5,000m級の峰々のアルペンスキー等々

世界初 アルタイ山系の探訪

○最高峰ペルーハ(4,506m)登頂
○ハイキング等々。'83 7/21(木)~8/15(月) 26日間

(株)日ソ旅行社 政府登録一般 第 98 号

☎ 404-1751(代)

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷1-20-1
パークアベニュービル

案内書呈

7	5	8	7	4	7	4	28	25	24	22
7	0	6	3	2	1	0	日	日	日	日
1	8	8	1	6	物	改	(月)	(金)	(木)	(火)
1	8	5	6	4	故	8				
小	陳	小	加	白	小	杉	会員移動 (2月) 今月の来室者46名 指導委 科学委 青懇 保護委 集会委、 婦懇、自然			
林	林	藤	保	慶	比	浦				
昌	光	利	男	子	類	英				
治	漢	明			卷	午				
(56	9				尚					
・30)					美					
					(2・3)					

図書受入報告(1)

図書委員会

昭和 57 年 8~12 月分受入図書(つづき)

- 23 ブルジュワルスキー著 田村俊介訳「中央アジアの探検」白水社 1982(訳者寄贈)
- 24 明治大学エベレスト登山隊編「エベレスト西稜」1982(編者寄贈)
- 25 北海道大学バタゴニア遠征隊編「北海道大学バタゴニア遠征隊 1981-1982 報告書」北海道大学バタゴニア計画委員会 1982(編者寄贈)
- 26 近藤信行著「岩波ジュニア新書 50 登山入門」岩波書店 1982(著者寄贈)
- 27 日本大学ヒマラチュリ登山隊編「HIMAL CHULI South West Ridge 7893 m」1982(今野善郎氏寄贈)
- 28 藤木九三著「ヒマラヤの伝説」誠文堂新光社 1982(版元寄贈)
- 29 藤木九三著「アルプスの伝説」誠文堂新光社 1982(版元寄贈)

- 30 藤木九三著「チロルの伝説」誠文堂新光社 1982(版元寄贈)
- 31 丸山楽雲著「高島章貞」柳沢書苑 1979(大森久雄氏寄贈)
- 32 山口孝著「六十年の登山と滑降—教養とは何か?—」1982(書著寄贈)
- 33 崑崙攀登山崎教員隊編「シルクロードの白き神へ 慕土塔格北峰初登頂の記録 7427 m」スピダーニエ同人 1982(坂原忠清氏寄贈)
- 34 穂刈三寿雄 穂刈貞雄共著「槍ヶ岳開山播隆」大修館書店 1982(版元寄贈)
- 35 日本放送協会編「歴史への招待 24 昭和編」日本放送出版協会 1982(版元寄贈)
- 36 加藤保男著「雪煙をめざして」中央公論社 1982(版元寄贈)
- 37 国立極地研究所編「南極の科学 4 氷と雪」1982(編者寄贈)
- 38 岡島成行著「みんなが頂上にいた ドキュメント・男たちのチョコランマ北壁」ばあめ書房 1982(著者寄贈)
- 39 木崎甲子郎著「南極航海記」築地書館 1982(著者寄贈)
- 40 清水敏一著「大雪山わが山 小泉秀雄」1982(著者寄贈)
- 41 朝日新聞社編「挑戦の記録チョコランマへの道<K2 8611>」1982(編者寄贈)
- 42 神代高校山岳部 OB カラコルム登山隊編「カラコルム登山報告書ユクシン・ガルダン・サール 7530 m」1982(編者寄贈)
- 43 ヘルマン・フーバー著 横川文雄訳「現代登山技術 改訂新版」山と溪谷社 1982(版元寄贈)
- 44 日本山岳会編「山日記 1983 年版」茗溪堂 1983(編者寄贈)
- 45 日本山岳協会登山隊 NHK 取材班共編「喬戈里峯登頂記 中国側北稜ルート征服の全記録」日本放送出版協会 1982(版元寄贈)
- 46 Nippon Institute of Technology "The royal buildings in Nepal" 1981(編者寄贈)

映画『南極物語』観賞券

第一次、三次南極観測隊とカラフト犬タロ、ジロをモデルにした東宝映画(封切予定七月末)の観賞券を大人千円、子供七六〇円と前売券より安く入手できます。詳細は事務局までお問い合わせを。

昭和五十八年四月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五十一
サンビュウハイフ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 佐々保雄

編集代表 岡沢祐吉

電話東京(四)四四三三

振替口座東京三三八二九番

印刷所 株式会社 校報堂